この歌手、この一曲

古里　靖彦*

はじめに

前回は,「この俳優，この一本」ということで，俳優さんの代表的な映画や作品を独断と偏見で選定した。皆さんよりは，何の反応もないが，又、続けて，同様趣旨のことを懲りもせず試みることとした。しかし，私の世界は，映像だけではない。従って，今回は,「この歌手，この一曲」にした。名曲を選ぶということは大変に難しいが，歌手を選んで，その歌手の極めの一曲を選ぶことは，それほど困難ではない。始終カラオケで歌ったり，車で聞いている曲を選ぶだけのことである。

このような，歌のことを書いたもので，一番の傑作は，久世光彦さんのエッセイ『マイ・ラスト・ソング シリーズ』である。これは，自分が死ぬ時に，聞きたいとしたら，それはどんな曲かをテーマにしたエッセイである。本来であれば，一曲なのであろうが，どんな状況で死ぬか，わからないのに，一曲ではということなのであろう。いつか，シリーズとなり，六冊の本となっている。名著であり，歌を知るためにも，格好の本である。ところで，流石に，久世さんは，業界でも有名な，大物プロデューサーだけあって，いろんなエピソードを沢山ご存じであるが，素人の私としては，そうもいかない。せいぜい，歌手紹介位の意味しかないが，それはお許し下さい。

①島倉千代子　『東京だョおっかさん』

作詞：野村俊夫　作曲：船村徹

まずは，島倉千代子さん。最近 75 歳で亡くなった。一番に取り上げるほど，私が，この人が好きというわけでもなく，この人の歌をしょっちゅう歌っているわけでもない。島倉千代子さんは 1938 年生まれで，東京都の出身。子供の頃から，音楽活動をされていたよう。1955 年，16 歳の時に歌手デビュー。デビュー曲「この世の花」で人気歌手になる。1957 年，『東京だョおっ母さん』が大ヒット。映画化もされ，自ら主演する。この年初めて紅白歌合戦に初出場する。保証人になって多額の借金を抱えたりしたが，それでも人気は衰えず，トップ歌手の地位を保ち続けた。

ここで主要曲の歴史を見てみる。私が，歌える歌でもこれくらいはある。相当に浮き沈みがあったように言われているが，別に，『人生いろいろ』が，起死回生であったわけではなく，それまでも，『恋しているんだもん』，『ほんきかしら』，『愛のさざなみ』など，軽めのこの種の歌は，何度も出されている。いずれも名作である。

この世の花（1955 年，デビュー曲）
りんどう峠（1955 年）
東京の人さようなら（1956 年）
逢いたいなァあの人に（1957 年）
東京だョおっ母さん（1957 年）
からたち日記（1958 年）
思い出さん今日は（1958 年）
恋しているんだもん（1961 年）
襟裳岬（1961 年）
星空に両手を（1963 年）
ほんきかしら（1966 年）
愛のさざなみ（1968 年）
鳳仙花（1981 年）
人生いろいろ（1987 年）

2013 年 11 月 30 日受付
* 江戸川大学　情報文化学科教授　e- ビジネス

この中で，この人の一曲は，『東京だョおっ母さん』を採りたい。歌詞をすべて書くわけにはいかないが，要約すれば，田舎の母を娘が東京案内する話で，兄は戦死し，靖国神社に眠っているという筋書きになっている。1957年の作であるから，このような風景がそこらじゅうで見られたのであろう。私自身，1964年，高校2年の時に東京へ移ったが，長崎の祖母が上京するたびに，「東京だョおばあちゃん」をやったものである。この歌を思い浮かべながら。当時，長崎から東京までは，「急行雲仙」で24時間もかかった。そうそう来られたものではなかったのである。

この歌の紹介。まずは，『ここが　ここが　二重橋　記念の写真を　とりましょね』。そして，母と妹が目指すのは『あれが　あれが　九段坂　逢ったら泣くでしょ　兄さんも』。その後は，少し，気を楽にして，『ここが　ここが　浅草よ　お祭りみたいに　賑かね』。私が，初めて上京した際も，祖母を案内する時も，全く歌の通りであった。プロの作者はすごい。

ついでに，これに並び称される名作，三橋美智也さんの『東京見物　作詞：伊吹とおる　作曲：佐伯としお』を紹介しておく。発売は，1957年で，奇しくも，『東京だョ』と同じである。少し余裕が出て，戦争を振り返る気持ちが出てきたのかもしれない。やはり，日本人は，戦争を心のうちに抱きながら生きているのである。

『東京見物』は，母と弟である。二人が向かうのは，先ずは，『お堀にうつった　二重橋』，ここは同じ。兄貴は，同様亡くなっており，ここで登場する。『云ってた兄貴も　草葉の陰で　にっこり笑って　見てるだろ』。次はどこだ。『上野の山の大男　東京見物　西郷さんだ』。それから，定番の『靖国神社だ　あの鳥居』，ここには，『やさしい兄貴が　戦友達と眠っているんだ　逢ってゆこ』。

ここには，私も近くへ出向いた折には，たまに立ち寄る。戦死した私の伯父が眠っている。それよりも，境内の中に掲示している，若くて戦死した人達の遺書を読みに行く。そして，戦争を知らない世代として，二度と戦争をしてはならないと決意するためにである。

②三橋美智也　『お花ちゃん』

作詞：矢野亮　作曲：吉田矢健治・小町昭

次は，『東京見物』つながりで，三橋美智也さん。三橋美智也さんは，1930年，北海道函館市（現・北斗市）に生まれる。この人も戦後の代表的な歌手である。私が子供の頃は，テレビはなく，ラジオで，ヒット曲ベストテンのような番組をやっていたが，いつも，三橋さんが一位であった。子供心に，すごい人だなあと感じていた。又，そのころ，東映に行くと，よくこの人が，主演していて，それも，いつも東北に住んでいる。そして，蒸気機関車で，東京へ出てくるのだ。当時の映画には，必ず，歌があって，この人が，並外れた高音で，ラジオで聞いた歌を歌っていた。別に，ミュージカルではないのであるが，美空ひばりさん，石原裕次郎さん，小林旭さんみんなそうであった。古き良き時代か。澄み切った高音も当然で，もともとは民謡歌手である。津軽三味線の名手でもある。余談であるが，ある時，車に，三橋さんのCDを持ち込んだが，それが，三味線演奏のCDで，一日中，三味線の演奏を聴いていたことがあった。

1955年に，『おんな船頭唄』でデビュー。『嬉しがらせて泣かせて消えた』これが，大ヒットし，続けざまにヒット曲を出す。昭和30年代にはなんと18曲のミリオンセラーを出したそうである。

代表曲を挙げる。カラオケ屋さんの履歴には，必ず入っているし，カラオケのあるスナックでは必ずといっていいほど毎晩歌われる。

おんな船頭唄（1955年）
ご機嫌さんよ達者かね（1955年）
あゝ新撰組（1955年）
あの娘が泣いてる波止場（1955年）
リンゴ村から（1956年）
哀愁列車（1956年）
お花ちゃん（1956年）（共唱：斉藤京子）
俺ら炭鉱夫（1957年）
東京見物（1957年）
一本刀土俵入り（1957年）
おさげと花と地蔵さんと（1957年）
おさらば東京（1957年）

夕焼けとんび（1958 年）
赤い夕陽の故郷（1958 年）
岩手の和尚さん（1958 年）
古城（1959 年）
快傑ハリマオの歌（1960 年）連続テレビ映画「快傑ハリマオ」主題歌
達者でナ（1960 昭和 35 年）
石狩川悲歌（1961 年）
武田節（1961 年）
星屑の街（1962 年）
新撰組の唄（1962 年）
東京五輪音頭（1963 年）
いいもんだな故郷は（1974 年）明治製菓（現・明治）「カール」CM ソング

懐かしい歌がたくさんある。皆さんも，相応の年齢の方は，よくご存じだと思う。大抵が，東北地方を歌っている。この中では,『怪傑ハリマオ』やカールおじさんの歌がユニークである。

さて，この中で，何を選ぶか。オーソドックスな三橋演歌が数ある中で，私は，コミックソングの『お花ちゃん』を選ぶ。田舎で愛し合っている二人がいる。若者が，東京へ働きに行く別れの歌である。面白い歌であるが，田舎の風景と純粋に愛し合っている二人が澄み切った田舎の風景に浮かび上がる。昔はこうだったのだ。これは，デュエットソングで，相方は，斉藤京子さん。この人がいい。三橋さんに負けていない。今でもお元気である。さて，紹介すると，別れの決まり文句は，『泣いたって　泣いたって　あーすっかた　なかんべさ』。これに対し，『待ってる私を　つい忘れ　浮気を起こしちゃ　なんねいど』こうやって戒める。若者は，『おまえは俺らの　花嫁御』こう言って慰める。しかし別れは来る。『馬車コがトテトテ　急（せ）かすから』別れなければしょうがない。この続きはないが，果たして二人はどうなったのか。

二十年来の付き合いの，プロの作曲家，杉村俊博先生は，ピアノの名手で，私の歌に合わせて，何でも弾いてくれるが，この『お花ちゃん』と，奥村チヨさんの『くやしいけれど幸せよ』をお願いするときは，いつも少しだけ，不思議そうな顔をされる。

③吉幾三　『娘に…』

作詞，作曲：吉幾三

吉幾三さんは 1952 年，有名な，青森県北津軽郡金木町（現・五所川原市）の出身である。自作のデビュー曲『俺はぜったい！プレスリー』がヒットし，有名歌手となる。吉幾三さんは，天才である。天賦の才をフザケきりながら使っている。並みの人は，あまり無い才能をどうにか無理やりに遣り繰りしながら，あるように見せかけているが，吉さんの場合は，どうも，才能を持て余しているようにさえ思える。

少し話を変える。紅白歌合戦，私は，このようなお祭り騒ぎが大好きで，又、そのようなお祭りをああだこうだと斜めに見るのは，全くの大嫌いである。しかしである。NHK のプロデューサーさんに一言言いたい。視聴率が下がっているのは，色んな理由があるが，最大の理由は，こうである。私の評価では，どう考えても，歌のランクでトップクラスの，ちあきなおみさん，サザンオールスターズさん，八代亜紀さん，吉幾三さんらが，出場しないことである。種々理由がるあることは重々承知。しかし，ちあきなおみさんを引っ張り出すのが，NHK の役目ではありませんか。ローマ字の方々の歌は，特殊例外を除けば，歌がそれ程お上手ではなく，音程も不確かなことが多い。厳しい話，音叉で合わせればよく分かる。まあ，本題ではないので，これくらいにします。

吉さんの名曲は，数ある。挙げてみると，私が，しょっちゅう歌う歌だけでも，以下の通り，これだけの曲がある。特色は，東北を中心に人生を真面目に歌ったものが多いが，彼の才能は，そんなものでは済まない。例えば，デビュー曲の『俺はぜったい！プレスリー』，更には，『と・も・子』，『俺ら東京さ行ぐだ』，『TOFU〈豆腐〉』などのいわゆるコミックソングは，他の追随を許さない。ただ，面白いだけではない。その中に，人生の本音が含まれている。皆さんは，ほとんど聞くことはないと思いますが，もし機会があれば，聴いて

みて下さい。感動すること請け合いです。

俺はぜったい！プレスリー（1977年）
と・も・子（1978年）
俺ら東京さ行ぐだ（1984年）
ゲゲゲの鬼太郎（1985年）
おじさんサンバ（1985年）
お父さんのタンゴ（1985年）
雪國（1986年）
海峡（1987年）
みちのくブルース（1987年）
酒よ（1988年）
港（1989年）
酔歌（1990年）
女のかぞえ唄（1991年）
夜更けのメロディー（1992年）
娘に…（1994年）
情炎（1995年）
津軽平野（1996年）
あんた（1996年）
夢で抱かれて（2001年）
男ってやつは…（2004年）
TOFU〈豆腐〉（2004年）
酒場のしんちゃん（2004年）

その中で，私は，真面目東北路線，コミック路線どちらにも属さない，『娘に…』を採る。

よくある，娘を嫁にやる時の父親の心境である。これは，現在女性若手ピカイチの演歌歌手，島津亜矢さんのための作品であるが，父親の歌であり，吉さんの方がいい。別れの前夜のこと，父が嫁ぐ娘に一人で語る。『寒い北の　はずれ町　体こわさず　達者でな』やはり，東北のどこか。『父親とは情けなく　意地っ張り者よ』別れが辛い父親は，なすすべもなく，酒を飲むしかない。『背中より　でかかった　赤いランドセル』思い出すのは，小学校入学の時。しかし，『長い旅　疲れたら　時々帰れ』これは，長持唄の世界。これから娘は，別の世界へ，旅立つことは分かってはいる。『みんな想い出　持って行け　写真一枚　あればいい』二人の娘を嫁がせた私としては，嫌なほど分かる。新婦のご招待で，結婚式に出席した時には，一度，この歌を歌いたいと思う。

④小椋佳『ほんの二つで死んでいく』

作詞，作曲：小椋佳

小椋佳さんは，1944年，東京生まれ。今更言うまでもなく，日本でも最高の作詞，作曲，歌手である。私も彼の歌とは，長い付き合いで，カラオケに行った時は，定番である。その都度，歌う歌は，気分によって変わるが。兎に角，発想が素晴らしい。並の人には，思いつくはずもない。頭の中でこねくり回した詞は，数多くあって，それはそれなりに悪くはないが，この人の詞は桁外れである。たまにコンサートに行くが，その時の話も常人ではない。歌と同じくらい素晴らしい。この人に匹敵するのは，さだまさしさんである。この人も桁外れている。やはり，コンサートの話も素晴らしいが，彼の場合は，話の方が歌よりも長い。

さて，小椋佳さんの歌である。この人が人前で最初に歌ったのは，1976年10月7日NHKホールでの初コンサートである。テレビでも放送された。いやいや，断れきれずに，やられたようである。そのことは，NHKのコンサートの時の話の中によく表れている。その後，『遠ざかる風景』として，2枚組の，LPが発売されたが，その中に，話もそのまま記録されている。 これが，小椋さんとして，もっとも重要なアルバムであると思うが，その後，CDとして発売された時には，話の部分が，かなりカットされていたように記憶している。残念である。このアルバムの内容は次の通り。

SIDE A
1. イントロダクション
2. しおさいの詩
3. 六月の雨
4. 俺たちの旅
5. 時
6. 少しは私に愛を下さい
7. 飛べない蝙蝠

8. 思い込み
9. スタンドスティル
10. 揺れるまなざし

SIDE B
1. 白い一日
2. ほんの二つで死んでゆく
3. 遠きにありて
4. めまい
5. 屋根のない車
6. 身辺抄
7. ゆきどまりの海
8. シクラメンのかほり
9. 木戸をあけて－家出をする少年がその母親に捧げる歌－
10. さらば青春

素晴らしい内容である。今でも，カラオケやコンサートで歌われる殆どの曲が含まれている。勿論その後も，多くの名曲が，ほかの歌手のためにも，自分の歌としても，作られているが，このアルバムは，豪華に過ぎる。

それでは，どれを選ぶか。あまりにも，いい歌が多すぎて困るが，ほとんど歌われていないものを三つ挙げる。『縦縞のシャツを着て』『なんということもなく』そしてもう一曲，『ほんの二つで死んでゆく』であるが，この中では，最も曲が美しい，『ほんの二つで死んでゆく』を採る。但し，惜しいので，ほかの二つも，あらすじだけ紹介する。

『縦縞のシャツを着て』は，若い女性でしょう，いつも待ち合わせをしていた紫陽花の咲いている，場所で，待っているのですが，彼は来ない。しかも『たしか今日は誕生日なのに　どうしてあなたに会えないんでしょう』『空が縦縞のシャツを着て　降りてきました～』来たのは，雨だったのです。

『なんということもなく』は，珍しく，さだまさしさんに提供した曲です。『不安と憧れ　期待と退屈　若さと混乱』『不満と傲慢　不遜と焦燥　甘さと危うさ』『孤独と充実　ゆとりと不自由　疲れと戯れ』昔，懐かしい喫茶店で，一人コーヒーを飲んでいる，若かりし頃の自分と今の自分を対比させながら過ぎた時に思いを馳せるのです。これもいいが，歌は，さださんの方が，あっさりしていて，少しいいので，ここでは採りません。

さて，『ほんの二つで死んでゆく』これは，実に不吉な題名であるが，たしか，記憶によると，小椋さんの子供が出来た時に作った歌だとか，本当にそうか。二つで死んでいく子供のために，『池よりも湖よりも海よりも深い涙を知るために』別れをいい，『池よりも湖よりも海よりも深い涙を知るために』はるかな旅をするのです。天才の発想というのか，凡人には知る由もなく，ただ歌ってみたいと思うのですが，この三曲は，残念ながらカラオケには入っていませんし，ピアノの先生もご存じない。残念。第一興商さん，宜しく。

蛇足ながら，カラオケに入っていなくて，今では入り，とても満足している歌を一つ紹介します。来生たかおさん，石川セリさんが歌っている『とめどなく　作詞：来生えつこ　作曲：来生たかお』。いい歌です。

⑤森繁久彌『流浪の旅』

作詞：後藤紫雲　作曲：宮島啓二

今更，私ごときが，森繁さんの歌をどうこう言うなど，とんでもない不遜な行為であることは，重々承知であるが，是非聴いてもらいたい歌がある。森繁久彌さんは，1913年，大阪府枚方市に生まれる。言わずと知れた，日本を代表とする俳優，歌手，コメディアンである。

その歌は，『流浪の民』。大正10年（1921年）に作られたものである。勿論，詳細は知る由もないが，からゆきさんを歌った歌であるようだ。何人かの人が歌っているが，最初に聞いたのは，ちあきなおみさんのものであった。このような，歌を歌わせると，ちあきさんの歌は，抜群で，それ以後暫くは，それで十分であった。そして，ある時，偶然にも映画の中で，森繁さんが，歌っていたのである。映画の一シーンであるから，ほんの短い間であったが，それは，衝撃を受けるほどの

歌であった。映画は,『海峡』。高倉健さん主演の,青函トンネル工事をテーマとした映画である。1954年（昭和29年）9月26日，洞爺丸転覆事故で千人を上回る人が犠牲になった。それまでも,津軽海峡では多くの犠牲者が出ていたが，これを契機に，壮大なトンネル建設計画が実施されることになったのである。風吹きすさぶ厳寒の地に,海底トンネルを建設しようとする訳で，その困難さは，いかばかりか。その映画化である。森繁さんの役は，さすらいの老トンネル掘り，岸田源助で，たっての頼みで，トンネル工事を引き受けたのだった。森繁さんは，部下の死を痛み，又、満州で亡くした娘を偲びながら，さすらってきた我が身を思い，切々と，荒涼の龍飛岬で，歌うのである。『流れ流れて，落ち行く先は』『北はシベリヤ　南はジャバよ』『流浪の旅は　何時までつづく』そして，唯一の望みは,『果なき海の　沖の中なる　島にでもよし　永住の地欲し』幼くして亡くした娘さんと同じお墓に入りたいのである。但し，残念ながら，CDとかに入っているかどうかは，定かではない。

ほかの歌もいくつか紹介したい。先ず，森繁さんは，童謡の名手である。独特の森繁節で，実に聴かせる。その他挙げると，まずは,『銀座の雀』,『知床旅情』,『船頭小唄』といったところか，これらは，楽に手に入る。

『知床旅情』は，森繁さんが作詞・作曲し1960年発表した。1970年に加藤登紀子さんが取り上げ，徐々に世間に知られるようになった。ところで，この歌に関しては，面白い事実がある。最後の歌詞の部分が，異なっているのである。森繁版では,『忘れちゃいやだよ　気まぐれカラスさん　私を泣かすな　白いカモメを　白いカモメを』であり，加藤版では『忘れちゃいやだよ　気まぐれカラスさん　私を泣かすな　白いカモメよ　白いカモメよ』となっている。当然，森繁版では,白いかもめが，気まぐれカラスに,「私を泣かせないで」と行っているのに対し，加藤版では，私が，気まぐれカラスと白いカモメに，別れの辛さを嘆いているのである。どちらがどうではないが,森繁版は，旅がらすの世界である。

森繁さんの作品にはもうひとつの『知床旅情』がある。

『オホーツクの舟歌』という曲であり，森繁さん自身もレコーディングしているが，倍賞千恵子さんも歌っている。メロディーは,同じであるが,途中，舟歌調の部分があり，力強い。ぜひ，聴いてみて下さい。

最後に，俳優さんとして敬意を表し，作品を少しだけ紹介する。

映画では，東宝の社長シリーズ　駅前シリーズが必見。代表作としては，東宝『夫婦善哉』，東宝『猫と庄造と二人のをんな』を挙げる。特筆すべきは，東宝の『地の涯に生きるもの』。

戸川幸夫の『オホーツク老人』を映画化でしたもので，知床半島の番屋に猫だけを相手にたった一人で毎冬をすごす老人の物語。運命のなせる業か,『知床旅情』と『流浪の旅』を思わせる。テレビでは，TBS『七人の孫』。更に，思い出深い役として，TBS『青年の樹』の父親役。少しだけの出演であったが，忘れ難い。

⑥ちあきなおみ『冬隣』

作詞：吉田旺　作曲：杉本眞人

誰が考えても，今、最も復活が望まれる歌手である。1947年東京生まれ。1992年に夫の郷鉄治さんとの死別をきっかけに一切の芸能活動を休止し，現在に至る。その説得力のある，歌唱には,定評があり，その後も，多くのアルバムが編纂され，特別番組が放送されている。後述するが，カバーする範囲は，オリジナル，懐かしのメロディー，カバー曲，ファド，シャンソンなど広範囲で,いずれも，ちあきワールドの趣がある。又，本人の演技力やコミカルな面を活かし，女優やタレントとしても活躍した。歌も演技も根は同じなのである。特に,「タンスにゴン」のCMシリーズは,有名である。又，映画やドラマでも存在感のある役で出演している。中では,『居酒屋兆治』のクラブのママが秀逸である。

それでは,歌をみよう。まあ名曲ぞろいである。

雨に濡れた慕情（1969年）

朝がくるまえに（1969年）
四つのお願い（1970年）
X+Y=LOVE（1970年）
喝采（1972年）第14回日本レコード大賞受賞曲
劇場（1973年）
夜間飛行（1973年）
円舞曲（1974年）
さだめ川（1975年）
恋挽歌（1976年）
酒場川（1976年）
矢切りの渡し（1976年）
ルージュ（1977年）
夜へ急ぐ人（1977年）
矢切の渡し（1982年）
役者／悲しみを拾って（1988年）
紅とんぼ（1988年）
片情（1988年）
黄昏のビギン（1991年）
紅い花（1991年）
百花繚乱（1991年）
紅とんぼ（1988年）

さあ，どれを採るか。沢山ある。『紅とんぼ』，『円舞曲』，『かもめの街』，『さだめ川』，『酒場川』，『矢切りの渡し』，『悲しみを拾って』，『黄昏のビギン』数ある名曲，名唱の中で，私は，『冬隣』を採る。因みに，『冬隣』とは，まわりの景色や雰囲気から，冬の近づいた気配が感じられる晩秋の頃を言うらしい。俳句に，飯田蛇笏の「はしり火に　茶棚のくらし　冬隣」。日本語らしい，控えめな美しい言葉である。

さて，ちあきさんは，夫君が亡くなられて，芸の活動をやめられたのであるが，これはその歌なのだろうか。寂しい夜，夫に先立たれた女が一人で，『あなたの真似して　お湯割りの焼酎のんでは　むせてます』そして，『叱りにおいでよ　来れるなら』と呼びかける。『地球の夜更けは　淋しいよ……』それでも，『あなたを怨んで　呑んでます』ちあきさんが酒が強いかどうかは，わからないが，この恨み唄を聴くと，弱いと思う。それでも，一人で焼酎を飲むしかないのだ。蛇足を。同じ趣の歌に，小林旭さんの絶唱歌『惚れた女が死んだ夜は』がある。これも，ひばりさんを偲びながら，『酒よ　酒よ　俺を泣かすなよ』と唸る歌である。そう，これも作曲は，杉本眞人さんであるが，この人が歌っている『惚れたも…』もいい。

⑦宇崎竜堂『男の花道』

作詞：阿木燿子　作曲・歌：宇崎竜童

宇崎竜童さんは，1946年生まれで，京都府京都市出身。1970年代から「ダウン・タウン・ブギウギ・バンド」で活動，その間，ソロ活動も行う。奥様は作詞家の阿木燿子さんで，「作詞阿木・作曲宇崎」のコンビで多くの名作を作り出している。宇崎竜堂さんを取り上げたのは，歌が上手いからである。絶妙の歌い手である。私は，本当に歌が上手い人の歌は，カラオケでは歌わないことにしている。桑田圭佑さんや宇崎竜堂さんである。余計なことであるが，山口百恵さんが，宇崎竜堂さんの作品を数多くを歌っており，これも悪くはないが，一度，竜堂さんの『港のヨーコ　横浜　横須賀』を聴いて見て下さい。彼は，歌だけではなく，映画にもたくさん出ている。いい男ではないので，それが又いい。先ほどのちあきさんもそう，武田鉄也さんもそう。歌が上手く，それほど美男，美女でない歌手は，なぜかいい俳優である。

いい歌は，数多くあるが，特に，名曲を挙げる。

知らず知らずのうちに（1973年）
スモーキン’ブギ（1974年）
港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ（1975年）
身も心も（1977年）
欲望の街（1979年）

又，山口百恵作品の代表は，次の通り。
横須賀ストーリー
夢先案内人
イミテイション・ゴールド
乙女座 宮
プレイバック Part2
絶体絶命

曼珠沙華
美・サイレント
しなやかに歌って
ロックンロール・ウィドウ
さよならの向う側

映画では，特に下記の作品がいい。

曽根崎心中（1978 年　映画初主演）
駅 STATION（1981 年）
　日本アカデミー賞助演男優賞
上海バンスキング（1984 年）
　日本アカデミー賞助演男優賞

さて，歌で採り上げるのは，まあほとんどの方が，ご存じない，お芝居，『男の花道』の主題歌『男の花道』である。これは，世の中の全く出回っておらず，その時に売っていたシングル盤だけである。少し，この芝居について，説明する。内容は，オリジナルに基づいたもので，今回のお芝居とは，多少異なる。

原作は，小国英雄。長谷川一夫と古川ロッパの顔合せで映画化され，確か，長谷川さんは，お芝居でも演じられていたと記憶している。長谷川さんの女形では，『雪之丞変化』が有名であるが，この男の花道も素晴らしい。この芝居，歌舞伎役者の中村歌右衛門旅先で，失明の危機に陥る。「中村歌右衛門の目を治せるのは私だけだ」と居合わせた，名医土生玄碩が助けることとなる。そして，一年後，歌右衛門は，江戸で，連日超満員の興行中である。その時，玄碩は，ある旗本の宴席にいたが，芸を強要され，これを拒否し，「真の踊りを踊れるのは三世歌右衛門をおいていない」，「自分が頼めばここへきて踊ってくれる。ダメなら切腹する」と言い放つ。使いが走るが，歌右衛門は，舞台の真っ最中。役者は親が死んでも舞台を空けることはできない。さあ，どうするか。この時，歌右衛門は，実際の客先を自分の客と見立て，失明の経緯，恩人の苦境を切々と語り，舞台を空ける許しを請うの出る。この芝居のハイライト。当然，大向こうより，「歌右衛門，行ってやれ」の声がかかる。そして，歌右衛門は，花道を玄碩の待つ旗本亭へと走るのである。

これを少し脚色したのが，今回の芝居。主役は，中村福助さんと中村梅雀さん。演出マキノ雅彦さん，そして，音楽が宇崎竜堂さん。豪華だ。さて，芝居が始まろうとしている時に，パルコ劇場に宇崎竜堂さんの歌が，序曲のように流れるのである。宇崎竜堂さんには珍しい演歌調の曲である。

阿木燿子さんの詞が素晴らしい。彼女も天才だ。『外しちゃいけない道ゆえか　一寸先は闇』懸命に人は前に歩く。『おそるおそる手探りして　ともし火さがす』しかし，そう簡単には行かない。『風に山がつけば嵐　夢に人をたせば儚い』『花に風が吹けば吹雪　鳥の羽をもげば飛べない』それでも『それを覚悟で生きてゆく』のが人の道。歌舞伎の世界を彷彿とさせつつ，芝居の幕が開く。福助さんと梅雀さんのお芝居にうっとりする中，芝居の幕が下りる。気が付けば，私の前の席には，見慣れた顔が。何と宇崎竜堂さんであった。

その他，難しいが，『欲望の街』がいい。何とも都会の悲しさが表現されている。これは，映画『白昼の死角』の主題歌である。沢たまきさんの作品もあり，同様素晴らしい。

これも，阿木燿子さんの作詞，天才はすごい。『お前の背中ごしの街が今　夕陽の中で　燃え始めた』情景が浮かぶで。『愛しい人よ　もう一度振り向き　もう一度　この胸で泣きなよ』『せめて　夜が来る前は　お前の涙を信じよう』どうやら，先も真実もない，束の間の愛か。どうせ『都会は明日が見えない ah…　欲望の街』真実（まこと）は似合わない。

⑧石原裕次郎『憎いあンちくしょう』
**　作詞：藤田繁夫　作曲：六條隆**

石原裕次郎さん，1934 年，兵庫県神戸市須磨区の生まれで，北海道小樽市，神奈川県逗子市で育つ。いずれも海だ。

今更，紹介するまでもない。昭和を代表する大スターである。私は，昭和を代表するスターは，吉永小百合さんと長嶋茂雄さんとこの石原裕次郎さんであると信じて疑わない。残念であるのは，

小百合さんと長嶋さんのサインは，持っているが，裕次郎さんは，早く亡くなったために，持っていないことである。さて，裕次郎さんは，映画も歌もありすぎて紹介するのは難しいが，推薦する意味で，選んで紹介しよう。どれも，いい作品である。

まずは，映画，挙げたらきりがないので，好きなものだけであるが，まあ凄い。

勝利者
鷲と鷹
俺は待ってるぜ
嵐を呼ぶ男
夜の牙
錆びたナイフ
陽のあたる坂道
明日は明日の風が吹く
風速 40 米
赤い波止場
嵐の中を突っ走れ
紅の翼
清水の暴れん坊
鉄火場の風
あじさいの歌
青年の樹
天下を取る
喧嘩太郎
やくざ先生
街から街へつむじ風
あいつと私
堂堂たる人生
銀座の恋の物語
青年の椅子
雲に向かって起つ
憎いあンちくしょう
零戦黒雲一家
若い人
花と竜
何か面白いことないか
夜霧のブルース
太平洋ひとりぼっち
赤いハンカチ
夕陽の丘
鉄火場破り
泣かせるぜ
二人の世界
青春大統領
夜のバラを消せ
帰らざる波止場
夜霧よ今夜も有難う
嵐来たり去る
黒部の太陽
風林火山
栄光への 5000 キロ
富士山頂
男の世界

次は，歌だ。好きな歌のみ。大抵は，歌える。

俺は待ってるぜ（1957 年）
錆びたナイフ（1957 年）
嵐を呼ぶ男（1958 年）
鷲と鷹（1958 年）
銀座の恋の物語（1961 年）
（デュエット 牧村旬子）
街から街へつむじ風（1961 年）
銀座の空にも星がある（1962 年）
（デュエット 牧村旬子）
憎いあンちくしょう（1962 年）
赤いハンカチ（1962 年）
/ 露子に逢いたい（1962 年）
花と竜（1962 年）
夕陽の丘（1963 年）（デュエット 浅丘ルリ子）
骨（1963 年）
俺はお前に弱いんだ（1964 年）
二人の世界（1965 年）
泣かせるぜ（1965 年）
夜霧の慕情（1966 年）
逢えるじゃないか又，あした（1966 年）
こぼれ花（1966 年）
夜霧よ今夜も有難う（1967 年）
粋な別れ（1967 年）

港町 涙町 別れ町（1969 年）
君も生命を（1969 年）
サヨナラ横浜（1971 年）
恋の町札幌（1972 年）
別れの夜明け（1974 年）（デュエット 八代亜紀）
ブランデーグラス（1977 年）
夜のめぐり逢い（1979 年）
（デュエット 八代亜紀）
ふたりの港町（1979 年）（デュエット 八代亜紀）
おれの小樽（1983 年）
わが人生に悔いなし（1987 年）
北の旅人（1987 年）

大抵は，歌と映画は，対になっており，映画の主題歌が多い。裕次郎さんは，歌が上手くないという人もいるが，とんでもない。おそらくは，あまり，練習もせず，ブランデーグラスでも傾けながら，タバコをくゆらせながら，歌ったのであろうから，抜群に上手い歌手である。その中では，これもあまり，知られていない，『憎いあンちくしょう』をとりたい。これは，映画としても，間違いなく，彼の代表作である。他に，中原中也の詩を歌った，『骨』もいい歌である。どちらも，素人が歌うのは，超難度の歌である。

『憎いあンちくしょう』は，優しい流れるようなメロディーで，優しい詞が続いていく。『愛する　喜び　悲しみ　いずこに』『めくれど　めくれど　果てないリフレン』『柔肌　かたえに　黒髪　たぐれど』『燃えたち　燃えおち　消えゆく　炎よ』裕次郎さんの語るような声が流れる。語れば語るほど，人が生きるということは，つかみどころがなく，あても果てしもなく，実態は，形もなさずに消えてしまう。

⑨ Charles Aznavour（シャルル・アズナブール）
『Et Moi Dans Mon Coin（街角の瞳）』
作詞，作曲：Charles Aznavour

紙面も残り少なくなってきた。少し，知性と教養を披露することとしよう。好きな，シャンソン歌手を二人。一人は，Charles Aznavour さん，もう一人は，Georges Moustaki さんである。

シャルル・アズナブールさんは，1924 年は，フランス・パリ出身のシンガーソングライター・俳優である。シャンソンの名手で，多くの作品がある。日本でも，多くのシャンソン歌手が影響を受けており，彼の歌をカバーしている。日本語で歌われることも多い。

代表曲を挙げる。どれも素晴らしい。一度聴いて見て下さい。

Mourir d'aimer （愛のために死す（炎の恋））
Ave Maria （アヴェ・マリア）
Isabelle （イザベル）
Sur ma vie （生命にかけて）
Et pourtant （想い出の瞳）
Hier encore （帰り来ぬ青春）
Que c'est triste Venise （哀しみのヴェニス）
Les comédiens （コメディアン）
Reste （じっとこうして）
Jezebel （イザベル）
Emmenez-moi （世界の果て）
La bohême （ラ・ボエーム）
La mamma （ラ・マンマ）
Je voyage （私は旅する）
Et moi dans mon coin （私は一人片隅で）

La plus belle pour aller danser （Sylvie Vartan）

参考までに。アイドルを探せ（シルヴィ・バルタン）の作詞も担当している。

ここでは，中でも名曲の『街角の瞳（一人片隅で）』を取り上げる。シャンソンであるから，物語がある。内容を紹介する。

『僕は，恋が終わりかけた恋人とレストランの片隅で食事をしている。二人の間には，何か，これまでと違う風が流れている。向こうから，一つの視線が，彼女に注がれている。もう，君の心の中には，彼が入り込んでいるようだ。話すこともそぞろ。そろそろ終わりが来たようだ。君は，『どうしたの』と聞くけれど，僕には，『今日は素晴らしい夜だった』そう言って，去っていくしかす

べはない。』

この曲は，日本人の歌手もたくさん歌っている。布施明さんは，『街角の瞳』，金子由香利さんは，『私は一人片隅で』，加藤登紀子さんも，『私は一人片隅で』。金子さんと加藤さんの歌では，恋の終わりを知るのは，女性の方になっている。訳は知らない。このように，歌比べをするのは楽しい。解釈の違いが分かる。日本人では，加藤さんがいい。初めてこの歌を聴いたためでもあるが，低い澄んだ声で，歌うのがいい。最後に楽しかったという部分は，せりふ的になるが，加藤さんのこの部分が特にいい。

⑩ Georges Moustaki（ジョルジュ・ムスタキ）『Ma Solitude（私の孤独）』

ジョルジュ・ムスタキさんは，1934年生まれで，エジプト・アレクサンドリア出身のギリシャ系セファルディムユダヤ人。フランスを代表する歌手，作者である。日本でも，大塚博堂さんやさとう宗幸などが，ムスタキさんの曲をカバーして歌っている。

代表曲は，次の通り。いい歌をムスタキさんは，切々と独特の声音で歌い，言葉はわからなくても心にしみる。

Ma Solitude （私の孤独）
La Dame Brune （ブリュネットの貴婦人）
Le Temps de Vivre （生きる時代）
Le Meteque （異国の人）
Sans La Nommer （名も告げずに）
En Mediterranee （地中海にて）
Flamenco （フラメンコ）
Le Facteur （若い郵便屋）
Sarah （サラ）
HIROSHIMA （ヒロシマ）
Et pour Tant dans Le Monde （この世の果て）
Les Amoure Finissent Unjour （ある日恋の終りが）

この中で，『Ma Solitude（私の孤独）』を選ぶ。

この歌は，1974年4月からTBS系で放映された，テレビドラマ『バラ色の人生』で，主題歌として使用された。木下恵介「人間の歌」シリーズ第14作。おんぼろアパートに住む若者たちのドラマであった。出演は，寺尾聰さん，香山美子さん，仁科明子さん，森本レオさん，草笛光子さんほか。しかし，ドラマも良かったが，始終流れるテーマソングが衝撃的であった。それが，『私の孤独』。その詞が，素晴らしい。

フランス語では，仕方ないので，要約すると，『私は，いつも彼女と一緒にいる。おかげで恋人のようになってしまった。いろいろ学ぶこともできた。放り出してもめげない。何があっても，どこへ行っても，彼女は僕と一緒。死に際にも一緒にいることだろう。そう，私は，一人ではない。彼女といつも一緒だから。“私の孤独”といっしょだから。（古里意訳）』。さすが，フランスのエスプリ，お洒落ではないか。私も本当のところ，“私の孤独”が嫌いではない。

最後に。

久しぶり，文章を書いて楽しかった。最初は，少し，苦労をしたが，色んなことを調べているうちに，様々なことが思いだされた。我々は，日々随分と音楽の中で，生きているのだ。想い出は，音楽とともにあるのだ。終わるのが，いささか惜しい気もするが，少し，疲れた。まだまだ，いい歌，いい思い出は，降る雪のようにあるが，小出しにするのもいいもんだ。

注：本文に引用している歌詞は，全て，本著者所有のCDを参照しています。